慶應義塾大学　グローバルCOEプログラム　論理と感性の先端的教育研究拠点

Newsletter

2009 June No, 8

CARLS

Centre for Advanced Research on Logic and Sensibility

ニューロイメージングと倫理問題
Neuroimaging and Ethical Problems

小川誠二　東北福祉大学感性福祉研究センター　特任教授
Seiji Ogawa　Tohoku Fukushi University - Professor

現今、人間の「こころ」（mind/heart）は脳にあるということに異論を唱えるものは居ない。脳の構造と機能に関する知識をもとに、ニューロイメージングの手法を使ってこころの神経基盤を探る努力が盛んになっている。ひとの関与する社会科学の諸問題が脳の中で如何に処理されているのかを可視化することは慶應義塾大学グローバル COE プログラムの一つのテーマである。ひとがひとである所以を脳科学にもとめるとすると、その研究のもつ社会との接点において倫理問題が浮上するのは当然である。「脳の構造と機能」は単に物理・化学および生物学の問題ではなくなっている。Neuroscience of Ethics と Ethics of Neuroscience の両面、倫理に関する脳現象を調べる前者、研究テーマそのものへの倫理的疑問や社会につながる研究結果の解釈・利用において生ずる倫理問題が対象とされる後者、においてニューロイメージング（特に fMRI）がしばしば話題になる。裁判でヒトの性格判断に fMRI を利用しようとするものや、商業利用のために fMRI の結果を過剰解釈する例もある。またマスメディアでの eye-catching な勝手な引用報道もよく聞く。

fMRI は、原理的には、脳機能の限られた側面を測るだけである。よく言われる如く、fMRI では、脳での心理活動を構成するための必要条件を知るのみで十分条件には至らない。測定される幾つもの機能活動の部位での活動だけで心理現象が現れるわけではない。また、fMRI の信号からは、その部位で活動の起きたことを検知出来てもその情報処理のコンテントは分からない。これは fMRI の信号が神経系でのシナップス活動に連結したもので、axon を通っていくパルス（情報内容を持つ）とは直接関係がない為である。それでも、遅い応答ながら real-time で非侵襲的測定が可能な fMRI は脳内機能活動を探る手立てとしては有用である。社会科学的疑問を脳に訊くことにより、どのような部位がその疑問解決に使われるかを知ることが出来る。

ここで問題となることの一つは、同定された部位の機能の specificity が、特に高次機能部位で、大変漠然としたものであることである。それ故、それら部位での活動の意味付けにおいて、結果の解釈に任意性がでる。これは、fMRI の結果、さらに脳機能の様子、に勝手な解釈を付ける non-science 分野での利用につながる。実験結果の解釈における仮説を明確にして結論を示し、結論の一人歩きを阻むべきことは他の science 分野と共通である。

Neuroimaging, especially fMRI, is involved in various issues of human behavior in the society. Although the non-invasive method is useful for studying neural bases of human judgment performed in the brain, there are some limitations and uncertainties in its capability. One needs to be aware of a possibility of being quoted by others with arbitral extension of interpretation of his results.

Contents

ニューロイメージングと倫理問題 Neuroimaging and Ethical Problems 1
国際シンポジウム“Emotional animals, Sensible humans” International Symposium “Emotional animals, Sensible humans” 2
「世界最高水準の教育研究拠点の構築と運用」 “Formation and management of world-level centers for education and research” 3
プロジェクト科目報告会・平成 20 年度若手研究成果報告会 4
Buddensiek 教授連続講演会報告・UVic-Keio Joint Seminar on Cognitive Psychology 報告 5
活動報告 6
研究員紹介 7
事務局だより 8

国際シンポジウム“Emotional animals, Sensible humans”

International Symposium “Emotional animals, Sensible humans”

（2月8－9日、慶應義塾大学三田キャンパス　東館6階　G-SEC Lab）

2009年2月8、9日にわたって本拠点の全体シンポジウムが行われた。午前中は山崎特別研究准教授の司会でIrene Pepperberg教授がEmotional animals and sensible humans: Application to gray parrots（情動的動物と感性的人間：オウム研究から）、Stan Kuczai教授がWhy do dolphins smile? A consideration of dolphin emotion and emotional expression（なぜイルカは笑うのか：イルカの情動と情動表出）という講演を行った。午後は文学部安藤教授の司会で京都大学板倉准教授がDevelopment of mentalizing in human infants（ヒト乳児におけるメンタライジングの発達）という講演、Canli Turhan教授がThe molecular psychology of human emotionality（人間の情動の分子心理学）という講演を行い、新しいアプローチを紹介した。休憩をはさんで、Richard D. Lane教授がLevels of emotional awareness and the brain: A framework that captures what is and is not unique to human emotion（情動の意識レベルと脳：なにが人間の情動に固有か）という意識レベルの段階の概説を行い、最後に梅田准教授がFunctional neuroanatomy of social emotion（社会的情動の機能的神経解剖学）として、機能脳画像研究、神経心理学研究を紹介した。なお、当日は若手研究者のポスター展示も行われた。

2日目は伊澤特別研究准教授の司会でマックスプランク研究所のAndreas Bartels教授がThe neurobiology of love（愛の神経生物学）、ローレンツ研究所のK. Kotrschal教授がEmotionality and relationships — about geese and humans-animal dyads（情動性と関係性：人間と動物の関係とガチョウ）という講演を行った。最後は篠塚研究員がAntagonistic effects of vasotocin on parental behavior in convict cichlids（コンビクトシクリッドの親行動におけるバソトシンの阻害効果）の実験を報告した。午後はSDM研究科前野教授によるEmotional Robots and Humans: What is emotion of robots and humans for?（情動的ロボットと人間：人とロボットの情動はなんのためか）という講演を行い、意識は虚構であるという議論を展開した。ついでDMC機構のPhillipe Codognet特別研究教授がLeibniz, the Art of Invention and Combinatorics: the dream of going beyond rationality in Modern and Digital Art（ライプニッツ、創意と組合わせ理論という芸術：合理性のかなたを夢見るデジタルアート）としてアートの起源としてのライプニッツの論理を紹介した。最後は東京芸術大学大学院の藤幡教授がUnderstanding through Visual Information: from a practical point of view（視覚情報理解：作品制作の現場から）として新しいメディアによる新しい芸術の可能生を論じた。その後、2日間のシンポジウムの総合討論を行い、何らかの出版を行うという合意にいたった。

（渡辺 茂）

World-class scientists from five different countries gathered to discuss on emotion and sensibility on (8-9th February, 2009). Followings are topics of the symposium. “Emotional animals and sensible humans: Application to gray parrots” (Irene Pepperberg), “Why do dolphins smile? A consideration of dolphin emotion and emotional expression” (Stan Kuczai), “Development of mentalizing in human infants” (Shouji Itakura), “The molecular psychology of human emotionality” (Canli Turhan), “Levels of emotional awareness and the brain: A framework that captures what is and is not unique to human emotion” (Richard D. Lane), “Functional neuroanatomy of social emotion” (Satoshi Umeda), “The neurobiology of love” (Andreas Bartels), “Emotionality and relationships – about geese and humans-animal dyads” (K. Kotrschal), “Antagonistic effects of vasotocin on parental behavior in convict cichlids” (Kazutaka Shimozuka), “Emotional Robots and Humans: What is emotion of robots and humans for?” (Takashi Maeno), “Leibniz, the Art of Invention and Combinatorics: the dream of going beyond rationality in Modern and Digital Art” (Phillipe Codognet), “Understanding through Visual Information: from a practical point of view” (Masaki Fujihata). After the symposium, we decided to publish a book or special issue of scientific journal based on the talks.

世界最高水準の教育研究拠点の構築と運用

Formation and management of world-level centers for education and research

（４月４日、慶應義塾大学三田キャンパス　北館ホール）

2009年４月４日に慶應義塾大学の３つのグローバルCOE拠点による拠点の形成や運営に関するシンポジウムが開かれた。これまでに研究内容に関するシンポジウムなどは数多く開催されているが、形成に到る道のりや運営方法に関するシンポジウムはなく、大変ユニークなシンポジウムであった。

開催に先立ち、安西前塾長の挨拶があり、ついで義本博司・文部科学省高等教育局大学振興課長が祝辞を述べられた。その後、生命科学分野の末松誠「in vivo ヒト代謝システム生物学拠点」リーダーが拠点の概要を説明した。最新の実験動物学と代謝システム生物学の融合によるヒト代謝システム生物学拠点には４つの研究クラスタがおかれている。生体防御系代謝解析クラスタ、in vivo モデル開発クラスタ、代謝ネットワーク解析クラスタ、細胞分化・代謝制御解析クラスタの研究クラスタである。学内では、医学研究科、理工学研究科、政策メディア研究科の連携で研究が進展しており、国際連携としてはカロリンスカ研究所、ボストン大学、ジョンズ・ホプキンス大学との連携により若手研究者に国際性を持たす試みを行っている。また、教員人事などをふくむ医学部全体の改革により、後期博士課程の競争率がアップし、有能な人材が確保されている。女性研究者の育成も積極的に行っており、世界レベルの女性研究者が誕生していることも特徴である。

次に情報・電気・電子分野の大西公平「アクセス空間支援基盤技術の高度国際連携」リーダーが、アクセス空間という言葉の説明から始め、革新的デバイス創成のための物理基盤工学、環境埋め込みデバイス工学、実世界実時間ネットワーク通信工学、知覚・表現メディア工学の４分野の連携による教育研究の展開をそれぞれ具体的な例を示して説明した。国際連携についてはハーバード大学、リヨン大学、西安交通大学をコアパートナーとし、国際インターンシップや国際ワークショップなどの取り組みなどを説明した。

最後は本拠点で、渡辺が拠点形成における理科系の拠点と異なる点を、テーマ選定の難しさ、大学院生の数、および研究者のキャリアパスの３点から説明した。その後、人文系の古くからの課題であり、かつ分野融合的なアプローチが可能なグローバルな課題としての「論理と感性」を生物学的基礎から文化的制約まで統合的に研究する５つのプロジェクトチーム（脳と進化、遺伝と発達、言語と認知、哲学・文化人類学、論理・情報）を紹介した。これらの研究チームへの参加が大学院の履修科目となる大学院制度の構築、若手の研究発信のための取り組み、ケンブリッジ大学や嘉泉大学（韓国）との若手セミナーなどを紹介した。国際連携のためにはまず国内連携が必要であるとの観点から５つのグローバルCOE拠点による「心に関するグローバルCOEネットワーク」の構築を行っており、また国際連携は個人レベルでの連携を研究機関間の連携協定に基づく機関連携にしている。そしてこの拠点の大きな特徴はMRIをはじめとする脳科学技術を装備した人文系拠点である点で、今後の人文系拠点形成のモデルとなることが期待できる。その後、若手研究者による具体的研究例として星、伊澤両名による研究紹介があった。

後半は村井前理事の司会による全体討議で、拠点の形成、運営方法、維持について若手の聴衆からの発言もあり、安西前塾長とともに活発な討論がなされた。　（渡辺 茂）

Three global COE centers, in vivo Human Metabolomic System Biology, High-level Global Cooperation for Leading-edge Platform on Access Spaces, and Centre for Advanced Research on Logic and Sensibility, held a joint symposium in 4th April 2009. The purpose of the symposium was not presentation of scientific results but practical discussion on management of the global COE centers. Professor Suematsu who is the leader of the global COE center in the field of life science, Professor Onishi who is the leader of the center in the field of information sciences, electrical and electronic sciences, and Professor Watanabe, the program leader of CARLS, introduced their centers and pointed out current problems in management and future plan of the centers. After the talks from each global center, we had very active discussion among speakers and audience.

プロジェクト科目報告会

（2月2日　大学院校舎 334 教室）

Debrief Session for Project Course 2008

2009 年 2 月 2 日、大学院校舎 334 教室にて、プロジェクト科目の報告会が開催された。プロジェクト科目は、通年の大学院履修科目であり、通常の講義形式の科目とは異なる。履修する学生が主体的に実験に取り組み、1年間の成果の発表を以って単位の認定となる。本科目は、本人文グローバルＣＯＥの前進である 21COE と並行する形で立ち上げられた「魅力ある大学院教育イニシアティブ」の主軸科目として開講され、発展してきた経緯があり、準備期間まで含めると今年度で4年目となる。昨年度は計5つのプロジェクトが開講され、報告会では 10 名の履修者が発表を行った。内容は、ヒトの臭覚による推論能力の検討から、生得的な言語基盤の検証、脳活動解析、論理学、データベース構築など、昨年よりも多岐に渡るものであった。数年来継続することでピンポイントな検証に至ったテーマや、今年度から新規に学生が考案したテーマも含まれており、いよいよ分野横断的な学生主体の科目となってきた感があった。この報告会は、成果発表会と銘打ってはいるものの、整ったデータの発表を単に求めるという場ではない。形となったデータではなくとも、必ずしも自身の専門ではない実験テーマに取り組んだその過程を、異分野の教員と多面的に意見交換を行うことで、実験として構築させる方法論を学ぶ場としての役割をより一層帯びてきた気がする。学生のこのような体験は、成果としては目に見えにくいかもしれないが、開講当初から履修院生らが積み重ねてきたものが、科目の特色として根付きつつあるように感じた。分野横断的な本教育拠点の特徴を生かした自由度の高い科目として、今年度以降もさらなる展開が期待される。

（伊澤栄一）

A debrief session for Project course 2008 was held on 2nd Feb. 2009. Ten graduate students gave oral presentations about the progress of their research projects. The topics of these projects were multidisciplinary, involving a variety of methods, such as psychology (behavioural experiment, meta-analysis, and fMRI study), linear logic, and even practical skills of building database. The presenters received the comments and guidance from their advisory professors. At the end of the session, certification of PROJECT course 2008 was awarded to each student.

平成 20 年度若手研究成果報告会

（2月10日　東館 6 階 G-SEC Lab）

Annual Seminar of Young Researchers

2009 年2月 10 日、三田キャンパス東館 G-SEC Lab において、平成 20 年度若手研究成果報告会を開催した。同会には、本人文グローバル COE の若手研究者 24 名と、本 GCOE の事業推進担当者によって構成される指定質問者が参加し、午前9時から午後7時近くまで、途中昼休みをはさんだものの、ほぼ半日にわたって、熱のこもった発表および質疑応答が行われた。

拠点リーダー渡辺茂の開会挨拶で始まり、慶應義塾大学文学研究科委員長中川純男教授の講評をもって幕を閉じた同会は、大きく6つのセッションに分かたれ、それぞれのセッションにおいて専門領域の近い数名によって、様々な視点から、本 GCOE が研究主題として掲げる「論理と感性」をめぐっての発表が行われたが、その概略は以下の通り。

セッション1：遺伝と発達からのアプローチ、セッション2：マーモセット研究を通じての比較認知神経科学的アプローチ、セッション3：認知科学的アプローチ、セッション4：脳科学、神経生理学からのアプローチ、セッション5：美学・美術史における論理と感性、セッション6：論理学・哲学的探究

分野ならびに方法論を異にする 24 名の発表は、「百花繚乱」かつ「百家争鳴」の相を呈した。したがって、その内容を一言で尽くすことは到底できない。しかしながら、「論理と感性」という共通テーマにたいする多方向からのアプローチが、このような形で「一堂に会する」意味はけっして小さくない。「専門外分野の知見に耳を傾け、新たな知識を獲得しつつ、自らの研究について再考を行う場」との拠点リーダーの言葉どおり、今回の成果報告を通じて、「近くて遠い」同僚たちの試みに多くを学ぶとともに、論理—感性研究における多元的協同の必要性および可能性についての自覚と期待の念をいっそう強くした次第である。

（小川芳範）

On February 10, 2009, a meeting was held at G-SEC Lab in East Building, where each of the twenty-four CARLS junior researchers gave a presentation on the contents and prospects of his/her research project in front of the attentive audience consisting of the interested public and senior researchers of the CARLS. The event continued for over eight hours but was lively with heated discussions throughout.

講演会

Buddensiek 教授連続講演会報告
Two Philosophical Lectures by Prof. Buddensiek

（3月2日　大学院校舎 334 教室、3月4日　南館4階カンファレンスルーム）

2009年3月2日と3月4日の両日にわたって、フランクフルト大学のフリーデマン・ブッデンジーク教授をお招きして二回の連続講演をしていただいた。その話題は古代の知識論から現代の形而上学的探究にまでわたった。

最初の講演で取り上げられたのはプラトンの『テアイテトス』である。ブッデンジーク教授は、井戸の底のタレスについての対話編中の挿話の新しい解釈を提示した。トラキア人の女召使が、タレスの世間知らずを嘲笑したという挿話である。タレスが井戸に「落ちた」とするのは、この女召使の間違った考えであって、彼女は、タレスが天文観測を行うために井戸に「降りた」のを理解しなかったのである。ブッデンジーク教授によれば、この挿話は、テアイテトスのような哲学を志す若者への警告として意図されている。すなわち、哲学の道を選ぶことは、まったく根拠のない中傷の的となりうるだけでなく、ソクラテス自身に起こったことが示すように、より世俗的な人間の不吉な「必要」の邪魔となって命を失うという危険さえ伴うという警告である。

第二の講演では、個体性と一者性という、現代の存在論に属する話題が取り上げられた。この講演によれば、部分とは、自己制御によって外界と対峙できる動的構造に因果的寄与を行う存在であり、個体とは、こうした動的構造のことである。この説明は、一方で、椅子のような単純な人工物や、石のような単なる物や特殊者を個体から除外し、他方、ロボットのような精巧に作られた人工物を個体の中に数えいれるという点で、われわれの通念を変革しようとするものである。（ヴォルフガング・エアトル＆飯田隆）

In the early March of 2009, Prof. Buddensiek of the University of Frankfurt gave two philosophical lectures. They are titled “From Ancient to Contemporary Metaphysics and Epistemology: Selected Topics.” In the first lecture Prof. Buddensiek talked about Plato’s dialogue *Theaetetus*. He presented a new reading of the anecdote which depicts the philosopher Thales at the bottom of a well. The second lecture treated a topic of contemporary ontology, namely the issue of individuality and unity. Prof. Buddensiek argued that the question of individuality and unity needs to be addressed via the notion of parthood.

UVic-Keio Joint Seminar on Cognitive Psychology 報告

（3月12－16日　University of Victoria, Canada）

カナダの Victoria 大学の S. Lindsay 教授と共同で認知心理学に関するセミナーを企画・実施した。日本からは4名の大学院生と伊東が Victoria を訪れ、Victoria 大学におけるさまざまなプログラムに参加した。これらには、同大大学院の授業科目（いわゆる「ゼミ」を含む）の聴講、心理学研究室で定期的に行っている Cognitive Seminar と称する講演会への参加などが含まれるが、中心的なプログラムは13日に行われた大学院生による研究発表会であった。

Lindsay 教授に最初に Joint Seminar について相談した時には、3月中旬は学生も教員も多忙な時期であるとのことで Joint Seminar の開催の実現が一時危ぶまれたこともあり、研究発表会への現地からの参加者の数に不安があった。しかし蓋を開けてみると、発表者と企画者2名の他に心理学のファカルティメンバー数名を含む10数名の参加者を得ることができた。発表は、日本からの院生のもの4件と Victoria 大の院生のもの4件の計8件であった。Lindsay 教授は2007年に慶應で集中講義をもたれた方で、日本から参加の院生は皆、フレンドリーな人柄を知っていたのだが、それでも同大の教授陣をはじめとする大勢の前で英語で発表することには緊張を強いられたようであった。特に討論の部分では苦労することが多かったようだが、これはこのような機会に苦労をして慣れていくしかないものであろう。みな、十分に準備に時間をかけ、発表、討論とも無事にこなしているようであった。一方、他の発表に対して質問や意見を述べるほどの余裕はなかったようで、その点が今後の課題と考えられる。

研究発表会のあった13日の晩には、発表者はみな Lindsay 教授のご自宅で開かれたパーティに招待された。料理好きの Lindsay 教授が自ら作られたモレイユ茸ソースをかけたサーモンのグリルや地元産のワインに舌鼓を打ちながら、Victoria の院生たちと楽しい交流の時間を持つことができた。公式なプログラム、非公式な活動とも充実したセミナーであった。（伊東裕司）

The UVic-Keio Joint Seminar on Cognitive Psychology was held in the middle of March. Four graduate students and a professor from Keio University visited the University of Victoria and joined in several academic activities there, including graduate seminars and a lab meeting. The core program of the joint seminar was eight talks, four by UVic graduate students and four by Keio University graduate students. More than 20 faculty members and students listened to and discussed the talks.

活動報告

開催日	研究・運営プログラム名	会議等の名称
４月４日	慶應義塾大学研究支援センター本部　慶應義塾大学グローバル COE プログラム	「世界最高水準の教育研究拠点の構築と運用 ―グローバル COE：若手研究者育成、国際戦略そして持続的発展」
５月 13 日	研究成果発信支援・プログラム委員会	英文論文執筆のための講習会
５月 21 日	慶應義塾大学文学部心理学研究室、全体	Dr. Soo-Young 講演会 “An unsupervised-supervised hybrid feature extraction of subtle emotional differences from human speeches”

公開シンポジウム ＜文化と医療＞再考―人類学と文化精神医学の相互関与性の現在―

Rethinking Anthropological and Transcultural Psychiatric Studies on Culture and Medicine: the Challenges of Interdisciplinarity, with Reference to Implications for Advanced Research on Logic and Sensibility

（２月 25 日　G-SEC セミナー室・G-SEC Lab）

２月 25 日、日本文化人類学会関東地区研究懇談会の共催支援をうけ、公開シンポ形式で企画実行した〔第Ⅰ部（15：30 ～ 17：15）：東館 GSEC セミナー室、第Ⅱ部（18：15 ～ 20：00）：同 G-SEC Lab―― Laurence J. Kirmayer マッギル大学教授（文化精神医学：H20 年度社会学研究科特別招聘教授）の基調講演 “Cultural psychiatry, medical anthropology and the challenges of interdisciplinarity”、清水透慶大教授（ラテン・アメリカ社会史）「呪医と村人、そして私：ラテン・アメリカ社会史研究から医療民族誌へ、そして現代医療の諸問題へ」、波平恵美子お茶の水女子大学名誉教授（医療人類学）「日本における文化と医療の研究：医学史から医療人類学まで」、宮地尚子一橋大学准教授（文化精神医学）による指定討論、司会・宮坂敬造の問題提起と総括、通訳・東京大学 Mohacsi Gergely 氏という構成――人類学―医療人類学―文化精神医学という相互関連性の深い分野間の交流セミナー機会設定、文化医療人類学の広範な動向を文化精神医学との接点・相互関与性の地平から確認、時代や文化・社会の基盤によって異なる様相を示す身体・感情・論理の研究に資す学際的感性の検討を狙いとした〕。宮坂が「文化と医療の経験の場の構造の時代転回：学際的相互関与性が発生する場」と題して問題提起。清水先生は、メキシコ現地村人と調査者との共感的感性成立過程、長期間の深い繋がりを志向する感性の要件を指摘。カーマイヤー先生は基調講演で、一精神医学徒として M. Lock、B. J. Good、A. Young 等の文化人類学・医療人類学者たちと出会って学際領域の共通地平に深く導かれた経緯、また、近年のグローバリゼーション進展で文化概念・旧メタファーの革新の必要が生じた際、深層の共通地平の根底に立てればこそ文化精神医学革新をなしえた事情、更に人類学との共通地平に立って脳科学に文化要因考慮の枠組を組み入れる研究の必要性を検討した。波平先生は、医療人類学が 60 年代後半北米で興隆した後に日本での分野紹介と発展を担った個人的経緯、日本の文脈ではこの分野の先駆けとなったのは医学系臨床研究者であった事情を述べた。宮地先生は、既存領域の区分からずれていくところで現実動態に有効な臨床・研究実践の契機が生まれるとし、そうした場に立つことこそが学際的共通地平に辿りつく前提となると指摘した。討論では、カナダ先住民調査でポストコロニアル状況の問題点をくぐりぬけた調査者と、近代的医療の一部動向にも関与する現地伝統的治療者との相互関係が検討され、＜文化的論理＞・感性・感覚の文化人類学という新動向に関係する論点も出た。平日で国立大入試日だったが、日本文化人類学会若手研究者を中心に 70 名以上が参集し、第Ⅱ部では医師・精神科医も加わり、盛況であった。共催者の同学会・山本真鳥会長と同・葛野浩昭理事のご尽力に感謝したい。

（宮坂敬造）

The main theme of this conference consisted in re-anchoring the common foundational paradigm, across the interdisciplinary pursuits, encompassing cultural-transcultural psychiatry, social history and cultural-medical anthropology, for the human mind as it appears in its cultural-transcultural manifestations, with a specific relevance for contemporary globalizing world situations and their localized correspondent repercussions. The above Japanese report offers a more detailed outline.

Philosophy of Ontology and Logic 国際シンポジウム

International Meeting on Philosophy of Ontology and Logic

（3 月 27 日　慶應義塾大学三田キャンパス東館ホール）

平成 21 年 3 月 27 日に慶應義塾大学三田キャンパスで上記の国際シンポジウム及び関連チュートリアルが本研究拠点が共催して開催された。また 2 月 28 日－ 3 月 1 日にも関連セッションが行なわれた。現代形而上学や知識のオントロジー的構造化や論理構造とオントロジー構造との関係、オントロジーと知覚の関係などを含むオントロジー、知識構造、現代形而上学に関する哲学、AI・情報科学、生命科学などを含む学際的討議が行われた。

27 日の本会議の主な招待講演として加地大介教授（埼玉大学）による“Four kinds of boundaries: From anontological point of view”Jinho Kang 教授による（Seoul National University）“The Early Wittgenstein on Logic and Metaphysics”Peter Simons 教授（Trinity College, Dubline）による“The Ontology of Quantity, and Why it Matters”講演が行われ、また Barry Smith 教授（New York State University）、Alan Ruttenberg 博士（Science　Commons）、溝口理一郎教授（大阪大学）による ontology の生命科学やセマンティックウェヴや知識情報工学への応用に関するチュートリアル特別講演も行なわれた。

また、一ノ瀬正樹教授（東京大学）による“Ontological Vagueness and Metaphysics: A Case of Freewill”、Peter Simons 教授（Trinity College, Dubline）による“Formal Foundations of Ontology”の招待講演も関連セッションで開催された。100 名を超える参加者があり、27 日会議後の懇親会も有意義な学際交流の場となった。（岡田光弘）

The International Meeting on Philosophy of Ontology and Logic and related applied ontology tutorials as well as associated sessions took place at the Mita Campus of Keio University. More than 100 people participated in the interdisciplinary meeting. The topics included contemporary analytic metaphysics, ontology, their relations with logic, their applications to knowledge representations, knowledge engineering, life science opon databases and others.

研究員紹介

鈴木康則

2009 年 4 月より非常勤研究員となりました、鈴木康則と申します。近現代のフランス思想、とりわけジャック・デリダの哲学を主な研究対象としております。デリダの思想は「脱構築」や「差延」のような幾つかのキーワードで語られることが多いのですが、そうした用語が必要となる背景についての理解を深めることを自身の課題としております。というのも、重要な思想が語られる背景においては、当の思想家たちに固有の「論理」と呼ぶべきものが内在していると思われるからです。「論理」を明らかにする研究手法は現在多数ありますが、自分はデリダと現象学の関係を辿りなおすことで、そうした「論理」の一部を提示できればと考えております。

佐々木掌子

ジェンダーとセクシュアリティを心理学的に明らかにしていくことを研究テーマとしています。特にトランスジェンダー（医療現場では性同一性障害と呼ばれます）やインターセックス（現在は性分化発達障害と名称が改められました）など、ジェンダーやセクシュアリティの非典型性に関心があります。ここグローバル COE では、遺伝と発達班に所属し、双生児データを用いた行動遺伝学分析から、ジェンダー／セクシュアリティ行動の遺伝と環境の諸相を明らかにしていきたいと思います。

また、病院で性同一性障害などジェンダーやセクシュアリティについて問題を抱えた人やそのご家族等に対してカウンセリングも行っています。臨床心理士です。

髙橋甲介

2009 年 4 月より「脳と進化班」の非常勤研究員となりました髙橋甲介と申します。私は主に、知的に障害のある自閉症児における言語や認知の指導法の技術的な向上に関して実験的に検討しております。特に論理的な関係性の学習において、事象間の「時間」や「空間」という要因を操作することによって、どのくらい学習を援助することができるかなどについて興味を持って取り組んでおります。また実験的に明らかになった事実を実際に指導する中でいかに役立てるかなどについても試行錯誤しながら楽しく検討を行っています。よろしくお願い致します。

日本学術振興会特別研究員（グローバル COE）　一方井祐子

社会学研究科心理学専攻の一方井祐子と申します。私は、社会性鳥類の個体関係の形成・維持に関わる認知能力等を研究しています。個体関係を維持するためには自分と相手との関係を理解して行動することが必要ですが、時には他個体同士の関係まで理解することが必要になります。今後、霊長類で見られるこのような認知能力が社会性鳥類で見られるかを調べ、収斂進化の過程を探りたいと考えています。どうぞ宜しくお願い致します。

事務局だより

活動予定

■「人間知性研究センター」
キックオフ・シンポジウム〜人間の知性の統合的理解を目指して〜

人間知性研究センターは慶應義塾大学と独立行政法人理化学研究所との包括協定に基づいて設置された先導研究センターで、慶應義塾からは医学研究科、システムデザイン・マネジメント研究科のグローバル COE および本拠点の各拠点リーダーが参加しています。

開催日：5 月 23 日（土）13：30 ～ 17：30
会　場：三田キャンパス東館 6 階 G-SEC Lab
主　催：慶應義塾大学人間知性研究センター　独立行政法人理化学研究所脳科学総合研究センター
プログラム及び講演者：
「人間知性研究センター」の目指すもの　慶應義塾大学文学部教授・人間知性研究センター長　渡辺 茂
特別講演「知性の起源と進化」　南フロリダ大学心理学部教授　清水 透
「ヒト神経疾患モデルマーモセットの作成と脳科学のための画像技術の開発」　慶應義塾大学医学部准教授　岡野ジェイムス洋尚
「ヒューマン・ロボットインタラクションからみる人間の知性」　慶應義塾大学理工学部准教授　今井倫太
「神経美学 (Neuroaesthetics) の可能性」　慶應義塾大学文学部准教授　川畑秀明
「人間知性進化の神経生物学的メカニズム」　独立行政法人理化学研究所脳科学総合研究センターチームリーダー　入來篤史
総合討論

■ 2009 年度第一回 MRI 講習会

開催日：5月31日（日）15:00 ～ 18:00
会　場：三田キャンパス西校舎 514 教室
主　催：MRI 安全倫理委員会
プログラム：MRI 特別安全講習（第一部）MRI に関する講義（第二部）
講　師：梅田雅宏（明治国際医療大学医学教育研究センター医療情報学ユニット准教授／日本磁気共鳴医学会理事）

■ The Mass-Count Distinction
— Philosophical, Linguistic, and Psychological Perspectives

開催日：6 月 8 日（月）　13：00 ～ 18：00
会　場：三田キャンパス東館 6 階 G-SEC Lab
主　催：哲学・文化人類学班
講演者：Francis Bond（独立行政法人情報通信研究機構）、Lajos Brons（慶應義塾大学文学部）、
Byeong-Uk Yi（トロント大学）、Mutsumi Imai（慶應義塾大学環境情報学部）

■ 公開シンポジウム「医療人類学の最前線Ⅲ：家族、医療、政策」

開催日：6 月 24 日（水）18:00 ～ 20:00
会　場：三田キャンパス東館4階セミナー室
企画班：哲学・文化人類学班
企画者：北中淳子
講演者：Amy Borovoy (East Asian Studies, Princeton University)
Kathryn Goldfarb (Anthropology, University of Chicago)
柘植あづみ（明治学院大学医療人類学）

編集後記　2009 年度最初の Newsletter をお届けいたします。新年度、新学期が始まり、新しいメンバーを迎え、4 月は気ぜわしく過ぎていきましたが、私たちのグローバル COE は三年目を迎えました。メンバーの皆様には、徐々にこれまでの研究・教育の成果が目に見えた形にまとまってくる頃ではないかと思います。私も、人文科学分野の連携という本拠点の特色を十分に生かし、直感的におもしろいと思わせるような新しい発見ができるよう、研究活動に精進していこうと思います。（山﨑由美子）

慶應義塾大学　論理と感性の先端的教育研究拠点
Centre for Advanced Research on Logic and Sensibility
Newsletter 2009. June. No. 8

発行日　2009 年 6 月 19 日
代表者　渡辺 茂
〒 108-0073　東京都港区三田 3-1-7　三田東宝ビル 7F・8F
TEL：03-5427-1156
FAX：03-5427-1209
keiocarls@info.keio.ac.jp
http://www.carls.keio.ac.jp/